

神学部の近況報告

神学部長 関谷 直人

昨年11月15日、神学部歴史神学専任教員であられた中野泰治先生が急逝されました。これは、神学部にとって計り知れない痛手であり悲しみです。中野先生の魂の平安を祈りつつ、とりわけ今、深い悲しみの中にある中野先生を失われたご遺族の皆様、そして先生のご講義を通じて多くの教えと薫陶を受けられた学生の皆様に、神様から豊かな慰めが与えられることを心よりお祈り申し上げます。また、このたびの出来事を受け、中野先生が担当されておられたクラスの引き継ぎや、次年度以降に中野先生が担当予定であったクラスの担当者変更など、学部全体で取り組んでまいりました。とりわけ、12月以降、中野先生のクラスを引き継いでくださった先生方には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

この1年間の学部を振り返ると、4月には募集定員を2名超える新入生を迎え、2024年度が始まりました。近年の入試事情について申し上げますと、文部科学省からの「基本的に募集定員通りの入学者を確保すること」という厳格な指導もあり、最終的な入学者数をガイドラインに沿う形で調整するため、非常に神経を使う必要があります。他の学部比べて学部定員が少ない神学部においては、一つの入試の定員の小さな「差」が容易に最終的に入学定員の超過や定員割れにつながるからです。神学部の入学者は、定員のほぼ半数が推薦入試を通じて、残りが一般入試および大学入学共通テストを通じて入学しています。推薦入試にはさまざまな種類がありますが、他者の推薦を必要とせず自身で応募できる「自己推薦」や、キリスト教の教会やキリスト教主義学校からの推薦を受ける「公募推薦」などが代表的です。近年、特に推薦入試で入学される新入生のために、英語や小論文指導などの入学前教育を実施し、入学時の基礎学力の向上を図っています。

今年度はコロナウイルス感染拡大に伴って数年間実施されてこなかった、同志社びわこリトリートセンターを会場とする一泊の対面による「新入生キャンプ」が実施され、学生の皆さん同士、あるいは教員と学生の皆さんとの交わりを深める良い機会となりました。一時期大学をあげて推奨されたオンデマンド配信による授業や、Zoomなどを用いたオンライン授業もコロナウイルス感染症拡大が落ち着くにつれ、急速に対面の授業へと戻っていますので、今年度の新入生は「ポストコロナ元年」の学生さんと言えるように思います。

学部のカリキュラムについては、「15週の授業をもって1セメスターとする」というルールを堅持すると同時に、学生の皆さんの夏休みを利用した海外研修への参加を促進するための、夏休み時期の前倒しのニーズに応えるという難題をクリアするために、大学をあげて、最初と最後の週の授業をオンデマンド配信とし、対面授業を行わず、対面授業を13週にする試みを行っています（大学院でも採用されています）。この結果、春学期に関して言えば、対面授業の開始は4月の第2週からとなり、7月の3週には対面授業が終わることになります。この取り組みにより、教員側はほぼ全てのクラスの動画を最初と最後に撮影し、学生の皆さんが視聴できるように準備をしなければならず、神学部でもこうしたことに慣れておられない先生方は四苦八苦しながら、この新しい授業方式を取り入れておられます。ただ、学生の皆さんのために始められたこのやり方が、学生さんにとって本当に良かったのかどうかについては、いずれ検証をする必要があります。

大学院については、ここ数年定員を充足できない状況が続いており、「苦戦」を強いられています。この点については、学

部生をいかにして大学院へとつないでいくか、という学部-大学院の連携を意図した学部教育のあり方を検討する必要があります。

また、とりわけ私個人の関心事で言わせていただくと、日本キリスト教団の教師になっていかれる学生さんの数が、ここにきて一桁の最初の方で留まっていることは、ゆゆしき事態であると思います。2025年の春に牧会に行かれる学生さんは2名。このことについても、各個教会からすでにキリスト教信仰を持って入学してこられる入学者を期待するだけでなく、学部での学生生活を経て「召命」へと繋がっていくような機会の提供を可能とする「学部-大学院」連携のクラスの提供を積極的に検討する必要があると考えます。

神学部スタッフについては、2024年度から小原先生が学長となられ、2025年度からは私を含めて役職定年者が4人となり、神学部を中心に担っていただく先生方の減少と「高齢化」が進んでいます。しかし一方で、昨年度には聖書学の担当者として黒柳志仁先生をお迎えし、2025年度からは杉田俊介先生を組織神学担当教員としてお迎えすることができました。神学部に新しい風が吹き込まれることを大いに期待するところです。

来年度はいよいよ同志社大学創立150年記念の年です。この大きな節目に当たり、神学部も大いに飛躍したいところです。ただ、ここから先は次の学部長にバトンタッチいたします。1年間でしたが、つたない私の学部長としての学部運営をご一緒にお支えくださった、全ての皆さんに感謝いたします。



中野泰治先生の思い出

中野泰治先生の足跡

中野泰治先生は1973年にこの世に生を享けられ、2024年11月に地上の生涯を終えられました。51年の生涯の約半分は、神学の学びと教育・研究に捧げられたものでした。

中野先生は1995年に同志社大学神学部に入學され、神学研究科博士前期課程を経て（2001～04年）、イギリスのパーミンガム大学に学び（2005～11年）、PhDを取得されました。その後、2012年に同志社大学神学部の助手となられ、助教を経て（2013～16年）、2016年より准教授を務められま

した。

先生のご専門はクエーカー研究で、近年はとくに民主主義との関連でクエーカーの思想を追究されていました。クエーカー関連の翻訳書も出され、日本におけるクエーカー紹介にも尽力されました。普連土学園での研修の講演も引き受けられています。

神学部の授業は、「キリスト教史入門」「歴史神学概論」や演習科目、また「神学英語」や「アカデミック・ライティング」も担当されていました。

クエーカーがご専門であることから窺われるように、中野先生は既存の

制度的教会に対しては厳しい批判的な眼をお持ちでした。神学も、神学そのものよりは、近代思想との関連で関心をもたれていたようで、研究テーマも、「自由意志」「自己意識」「合意形成」「平和思想」に関わるものが多くを占めています。自己を問いながら、その展開可能なあり方を求められた中野先生のご研究が、これからどのように広がっていくのか、見届けられなかったことを無念に思います。中野先生のたましいが主の平安のもとにありますように、心から祈ります。

村上 みか

中野先生追悼

中野先生とは先生が神学部に来られて以来12年ほどのお付き合いがありました。仕事が速く、語学のセンスに優れた、これからの時代を担っていく研究者として、わたしは大いに期待を抱きました。入社当初は、毎日のようにわたしの研究室にやって来て、学術的なことや研究者の心持ち、神学部の現状と未来のこと、そして四方山話など楽しい時間を過ごしたことを懐かしく思い

出します。四条界限でお酒を飲みながらお互いくだをまくこともありましたね。急逝の訃報を知らされたとき、言葉を失いました。今でも受けとめきれないのが正直なところです。残念でありません。

中野先生は真っ直ぐなひとで、それゆえに不器用なところがあり誤解されることもありました。でも、信念をもっていつも熱心に物事に取っかかり、学生の面倒も良くみてくださいました。ま

るで24時間、頭をフル回転させているかのように、いつも真理（おそらく神の存在）を追究しておられたんだと思います。ときどき、わたしに「先生、しんどいっすよ」とおっしゃっていましたね。わたしの前を、中野先生はあつという間に走り抜けていきました。悲しくて残念です。天上ではどうぞ、少しはゆったりと神様にまみえて過ごされますように、中野先生、あなたの魂の平安を祈っています。

村山 盛華

中野先生に教えていただいたこと

中野先生には、入学直後の授業から卒業論文に向けた指導に至るまで、大学生活を通じて様々な場面でお世話になりました。大学生活を振り返ると、先生の存在がいかに自分の中で大きなものであったかを実感させられます。

中野先生は授業の中で、常にわかりやすさや面白さと学問的視点を両立させながら、熱心にご指導くださいました。ゼミの講義では、論文の書き方や形式に関する実践的な指導に加えて、私たち一人ひとりが興味や関心

に基づいた多様な研究発表を行えるように配慮してくださいました。私が卒業論文を書く際には、論文形式や専門性の重要さをわかりやすく教えていただくと同時に、読む人にわかりやすく、興味を持ってもらえる文章を書く大切さを具体的に教えていただきました。

そしてなによりも、中野先生は常に私達学生の事を第一に考えて行動してくださいっていました。質問や連絡をメールで送った際には、どのような時でもすぐにお返事をくださいました。大学院入試の受験の際には、先生にいつ

でも相談できるという安心感が、私にとって大きな支えとなりました。更には、私達の私生活での悩みや相談などにも常に真摯に対応してくださいました。

中野先生からは、本当に多くのことを学ばせていただきました。大学生活を通じて私が成長できたのも、先生のご指導のおかげであると確信しています。これからも先生からいただいた教えを忘れずに、思い出を噛み締めながら歩んでいきたいと思っています。

中野先生、本当にありがとうございます。

西口 壮明（神学部4年次生）

中野先生の思い出

中野先生とはじめてお会いしたのは、神学英語の講義でした。大学と高校のギャップに驚き悩んでいたときに、何の気なしに声をかけたのが中野先生でした。「明確な答えなんか出なくてもいい。渡邊さんがこうだと思うよう

に生きたらいいよ」とお会いする度に言い聞かせてくださいました。卒業した後も、一つの答えを出すことに固執しがちな私に「ほどほどで良いから元気で」と声をかけてくださいました。先生からのメールがもう来ないことが信じられず、毎日のように卒論執筆時

にいただいたメールや卒業後にいただいたメールを読み返しています。

どうか、どうか先生のいらっしゃる場所が、満ち足りた場所でありますように。

心からお祈り申し上げます。

渡邊 桐香（2024年3月卒業）

新カリキュラムについて 勝又 悦子

2025年度から新カリキュラムがスタートします。神学部の学びは、必修「神学入門」1科目のみで自由!が謳い文句でしたが、その実、科目間の関連が不明瞭で、演習も卒業論文も履修せず卒業する学生も多く、何を学んだのか実感がないとの声も上がっていました。学生がカリキュラム全体を俯瞰しやすくするためのカリキュラムマップやカリキュラ

ムツリーの全学的な導入に合わせ、現場の学生の声も参考にしながら、カリキュラムの既存科目、問題点を慎重に検討しました。その結果、必修は従来通り1科目2単位のまま、神学部の各領域で、基礎科目→展開科目→演習（さらに卒業論文）を軸に、種々のトピック科目が補うという構造を明瞭にして、従来の科目を再編しました。同時に、神

学部の各領域を横断する科目を設置し、学部内の学びの融合を図ります。さらに、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教の各領域から、それぞれ4単位、2単位、2単位を選択必修とし、一神教についての基本的知識を修得します。他方で、他学部等の科目36単位分について神学部科目や語学の必要単位超過分から振り替え可能とすることで、学びたいことを存分に学ぶことのできる真に自由で柔軟なカリキュラムを目指しました。

「地の塩」プロジェクト

勝又 悦子

「地の塩」プロジェクトの中核科目である「宗教と社会福祉2」(春学期)では、これまで通り止揚学園をフィールドワーク(FW)の場として活動させて頂きました。学生の個別FWの体験を面接授業で持ち寄り意見を出し合い、公開報告会では、止揚学園の福井生園長、東館容子さんにもお越し頂き、内容の濃い、そして、止揚学園での食事風景が溢れる食欲をそそられる報告会になりました。一方で、仲間の人たちとともにいることを「学ぶ」目的にしてよいのかという逡巡も生まれ、この授業の意義を改めて考える機会にもなりました。6月には、東九条にて合同FWを行いました。担当教員は3回目になりますが、毎回感じられる街の変化、そして3回目にして初めて理解できることもありました。

「宗教と国際社会」ではデライトファウンデーションの村上渡先生のご指導の元、教室での学びを進めておりましたが、渡航直前にバングラデシュの治安が悪化し、学内規定により、渡航中止、授業も中止という大変残念な結果になりました。が、教室での学びに於いても様々な切り口からバングラデシュの内情を学ぶことができました。また、このプロジェクトが国際問題の最前線に関わっていることも実感しました。

「宗教と社会活動」(秋学期)では、きょうと夜回り



止揚学園運動会



バザールカフェ合同FW

の会、愛隣デイサービスセンター、バザールカフェでの取り組みを続けています。初回面接授業には、桜井希先生、木村良己先生、平田義先生という伝説の三人衆(関谷談)にお越し頂いたのはこの授業ならではのことでしよう。各自、FWを進めたのち、最終報告会では、桜井先生、バザールカフェの麗華さんにもお越し頂き、学生が事前に作成した発表動画を元に意見交換しました。インクルーシブの在り方について鋭い指摘も出ました。自分から名乗ること、呼ばれたい名前を尋ねること…「名前」の持つ大切さも感じました。

2019年度から展開してきた「地の塩」プロジェクトですが、ALL DOSHISHA 教育推進プログラムとしては本年度が最終年度となります。来年度からは、神学部のプロジェクトとして展開します。節目の年として、年明けの1月には、このプロジェクトの柱でもある様々な授業手法をブレンドした学び(ブレンディッドラーニング:BL)による大学の授業改革に関わった教員が総括報告会を開催しました。6年間のBLの試行錯誤を経て得られた知見、提言、問題点を、オンデマンド動画配信授業の部と、動画と面接授業の



総括報告会



東九条合同FW

ブレンド型授業の部の2部構成で、総計8名の教員が登場しました。教員が一同に会し、各自の授業運営について報告する非常に貴重で有益な機会になりました。オンデマンド動画配信授業、BL授業の問題点、またFWの運営についての問題点も指摘されました。それでもなお、物理的に教室に来ることのできない学生への授業提供、動画を生かすための課題の出し方、教室でのディスカッションを惹起するための事前動画の有用性、ディスカッションによって学生自身が学ぶ可能性が提示され、このプロジェクトの有用性、可能性も再認識されたところではないでしょうか。2024年度から本学では、新しい学年暦が始まり、オンデマンド動画配信授業期間(DO Week)が設定された他、遠隔授業、特例型授業など、多様な授業形式が展開しています。「地の塩」プロジェクトの知見も本学に還元されることを期待しています。

来年度以降、神学部のプロジェクトとして、さらに発展させたいと考えております。FWでお世話になりました関係諸機関のみなさまに、これまでのご支援を感謝するとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。



「宗教と社会福祉2」報告会



止揚学園合同FW

ホロコースト記念館への研究訪問 (広島県福山市)

アダ・タガー・コヘン

キリスト教会イエズ会のメンバーによって建設され維持されているホロコースト教育センターは、第二次世界大戦中のナチスの壊滅的な人種差別的殺人行為を記念する教育センターです。博物館では、歴史的な出来事や、

ドイツ人による恐ろしい行為によってユダヤ人とその生活に何が起きたかを深く知ることができます。2024年11月、神学部の学生グループが日帰り博物館を訪れました。博物館のスタッフが戦前からドイツ降伏までの歴史を

説明してくれました。学生たちは、アンネ・フランクの部屋のレプリカや、よく知られているアンネ・フランクのバラのシンボルに感銘を受けました。ツアーには13人の学生と2人の教授が参加しました。

研究・学術交流

昨年の本誌にも書いたと思いますが、CISMORは、2022年度に行われた全学の研究センターの再評価によって「先端的教育研究拠点」の地位を失い、新たな研究事業計画を策定の上で継続申請をした結果、2023年度と2024年度の2年間にわたって「中核的研究拠点」としての存続を認められました。このタイミングでセンター長をコヘン先生から引き継いだ私の喫緊の課題は、大学からの予算や援助が大幅に縮小され、場合によっては全く得られなくなるなかで、センターの研究事業を継続できる体制を整えることであると考えてきました。

2023年度から2025年度までの3年間は、「先端的教育研究拠点」であった頃に配分された予算の残額を使用できるので、嘱託事務職員の雇用を継続するとともに、ウェブサイトの全面改修を進めてきました。現行のウェブサイトは、2003年の開設以来、継ぎ足し継ぎ足して使われ続けてきたようで、構造が複雑な上に規格が古くセキュリティが脆弱になっているという問題を抱えていました。また、日本語のページに加えて英語・アラビア語のページもあります。そうした多様なコンテンツを維持しつつ、最新の規格でより閲覧しやすい構造を整え、長く安全に使い続けられるウェブサイトへと改修するためには、相応の費用が必要とされます。2024年度は、このウェブサイトの改修を専門業者に委託して本格的に進め、年度末までに新しいサイトを稼働させることができることとなりました。2025年度以降は、新たなウェブサイトをセンターの顔として、様々なイベントや研究成果を発信していこうと考えています。

研究発信という面においては、2024年度もリサーチ・フェローの主催による様々なイベントが行われました。代表的なものとして、The 3rd Academic Workshop Co-organized by CISMOR and IKTINOS “Wisdom in the Bible and Beyond”（6月29日開催）や、日本中東学会と共催した国際学会「アジア中東学会連合（AFMA）第15回大会」（12月7日・8日開催）などがあげられます。センターの体制変更に伴って投稿募集が遅れていた『一神教学際研究』（JISMOR）についても、2024年度は年度末までに発刊できる運びとなりました。経費節減のためウェブサイト上でのPDF版の公開となりますが、多くの方に読んでいただければ幸いです。

2025年度以降の資金確保も不透明であり、神学部のご厚意による事務と図書スペースも使い続けられる保証はありません。センターを取りまく状況は相変わらず厳しいですが、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教に関する多彩な研究活動のためのプラットフォームとして、派手さはなくとも地道に継続していけるように2025年度以降も務めていこうと思います。神学部に関係の皆様には、引き続きの理解と支援をお願いいたします。（CISMORセンター長 森山 央朗）



CISMORとIKTINOSの共同ワークショップ

イギリス留学報告 廣垣 帆乃伽（神学部4年次生）



私は、2023年度の秋学期にイギリスのロンドンへ留学しました。約半年間という短い期間でしたが、色々な国からやってくる留学生達と毎日議論を交わしながら、とても充実した日々を過ごすことができました。

私が通っていた学校には、国籍や年齢も非常に多様な学生が所属しており、放課後には友人達とスピーキングクラブを開催して、英語力向上を目指しながら、お互いの国や文化についての理解を深めました。大学で宗教を学んでいるという私の経歴は、海外の学生にとっても珍しいようで、これまで学んできたキリスト教やイスラーム教を実際に信仰している友人

から信仰生活について話を聞き、逆に日本の神道や仏教の宗教観について意見を交わしたことは、大学での学びを深化させるものでした。留学生達とお互いの国について紹介し合うことは、日本の外側から自国について改めて考える貴重な機会でもありました。

私は、帰国してすぐに就職活動を控えていたのですが、クラスメイトには、フランスやドイツといった近隣のヨーロッパ諸国で働きながら夏休みに短期留学に来ている人や、就職活動を終えた日本人学生もいたので、今後のキャリアについて様々な角度からアドバイスを受けることができ、帰国後の就職活動においても非常に役に立ちました。

イギリスでは、多くの美術館に無料で入館できるので、休日には美術の教科書に載っている有名な絵画作品を鑑賞し、学校でできた友人と少し足を伸ばしてフランスやドイツなど、様々な国に旅行に行ってその土地の文化や歴史に触れることができました。

旅先で1番印象に残っているのは、スコットランドです。ロンドンから列車で片道4時間半ほどの場所にあるのですが、幼い頃から大好きなハリリー・ポッターの街並みが眼前に広がっていて、あの時の高揚感は生涯忘れないだろうと思います。

他にも、サッカー好きの友人と、ライオン対マンチェスター・シティの試合を観戦し、三笥選手のプレイを間近で観ることができたのはとても貴重な経験でした。

留学期間を通して、慣れない環境での生活など大変なことも多くありましたが、友人や家族など、多くの人に支えられながら、沢山の学びを得ることができました。

今、社会人を目前に控える中で感じるのは、実際に体験をすることでしか得られない学びや経験があるということです。自由に時間を使える学生最後の期間に、留学という選択をして本当によかったと感じています。



新任教員紹介

杉田 俊介

(すぎた・しゅんすけ)

2025年4月に同志社大学神学部の助教に就任した杉田俊介です。2025年度は「組織神学入門」や「キリスト教倫理」などの授業を担当します。

2003年から2012年まで、学生として神学部および神学研究科(博士前期課程、博士後期課程)で学んでいました。この間、一貫して小原克博先生の演習に参加し、多くを学びました。また、大学院では水谷誠先生や原誠先生からもご指導をいただきました。

専門はキリスト教思想、日本のキリ



スト教思想家の研究です。とりわけ、諸宗教の神学、キリスト教の文脈化、宗教と国家の関係といったテーマに関心を寄せています。博士論文では滝沢克己の思想、特にその宗教間対話論と天皇制論について批判的に考察しました。大学院修了後は関心が広がり、組合教会牧師である柏木義円の思想についても研究しています。現在は、柏木の国家主義批判と、彼の「神の肖像」論との関係に関心を持っています。

1977年兵庫県生まれです。1990年に札幌のバプテスマ派教会で洗礼を受け、2008年に日本基督教団仁川教会へ転会しました。2012年に教団の教師となり、出身教会でもある仁川教会で伝道師および牧師として仕えてきました。また嘱託講師として、神戸女学院大学や同志社女子

大学などでキリスト教関連の授業も担当してきました。仁川教会では茂洋先生、中野敬一先生、そして高森昭先生から牧会について多くの教えを受けました。この経験を生かし、神学部と教会を橋渡しするような働きができればと願っています。

趣味は読書や映画鑑賞、そして川や港で魚を眺めることです。好きな新島襄の言葉は「一人一人は大切なり」と「ナマコも決して馬鹿にはできず」です。

妻と7歳の娘がおります。娘の名前は新島襄の妻と同じ「八重」です。

ご指導いただいた諸先生方と自らを比べ、自らの乏しさ貧しさを痛感することが多々ありますが、学生たちのため、牧会者養成のため、そして神学研究のために力を尽くす所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

1年を振り返って

黒柳 志仁

詩編 143 編 5 節に次の言葉があります。「わたしは過ぎ去った日々を思い起こし／あなたの行ったことを一つ一つ思い返し／御手の業に思いを巡らします。」この詩編作者は、思い出となった過去の日々を振り返り、自分の目の前にある現実として見えています。H.W. ヴォルフは著書『旧約聖書の人間論』の中で、ヘブライ語聖書の時間性について「人間はちょうどボートの漕ぎ手のようなものである。(中略)つまり、ボートの漕ぎ手は、自分が漕いで来た進路によって方向をとりながら目標に到達する。この目前に姿を現した歴史が、未来の主を証するのである」と述べています。私たち一人ひとりが歩んできた過去の日々の思い出が、私たちの将来の方向を決める舵取りをする大切さを教えてくれています。この1年は、聖書を初めて読んだ日、神学に出会った日、親に反対されながら洗礼を受け

た日、ヘブライ語聖書を学ぶためにドイツに留学した日など、神学研究科に入学した当時の日々の思い出を辿りながら、授業を担当させて頂きました。今でも捨てずにとっておいた聖書学の授業ノートや、プリントを読み返すこともありました。それはキリスト教に親しみをもつようになり、キリスト教が私に近いものになった原点を大切にできなかったからです。聖書を他者にしてしまわずに、親しいもの、近しいものとして対話をしていく解釈を、これから授業で形にしていきたいと思えます。20年前と変わらない神学館の教室や2階ラウンジ、図書室は当時を思い出します。神学館入口前の2段ほどの段差に座り、よく将来一体何の職に就けば良いのか、日向ぼっこしながら友だちと悩んでいたのも思い出の一つです。前職でも大学教員を10年程していましたが、母校に帰るとまた違っ

た親しみを学生の皆さんに感じています。昨年12月に日本基督教団同志社教会に転入し、教室だけでなく教会を通じて、これから皆さんと出会う機会も大切にしたいと思います。



神学部長・神学研究科長 就任にあたって 村山 盛章

わたして良いのかと畏れながら、その重責に身が引き締まる思いです。神学部の

2025年度より学部長を拝命いたしました。歴代の学部長の先生方に前に、

発展のために誠心誠意尽くしていきたいと思っております。同志社大学創立150周年を迎える今年には神学部にとっても記念すべき1年となります。キリスト教主義の堅持と牧師養成の責務を十二分に果たせるように、同時に神学部の社会に

おける認知度や関心を高める工夫を施すことができるように、個性豊かな神学部スタッフが上手くコーディネートされ、主なる神がそれぞれの賜物を豊かに用いてくださいますように、わたし自身の職務を全うしていきたいと思えます。

派遣神学生の声

金 茶云

(神学研究科2年次生)

愛にふれて、愛にあふれて

私は金茶云(キムダウン)と申します。韓国からの留学生です。この度、派遣神学生としての2年間の経験を皆様と分かち合う機会をいただきました。心より感謝申し上げます。

私は2023年5月より、神戸教会に派遣され、神学生として働いています。この経験は私にとって貴重なものであり、神学生でなければ経験することのできない多くの学びがありました。焦ることなく、ゆっくり時間をかけて教会全般の働きや動きを学ぶことができました。働きの中で誤りを犯すこともありましたが、そのたびに教会員の皆様から励ましを受け、勇気づけられました。このような励ましやお支えにより、学業と教会での働きを両立しつつ、今日まで歩んでくることができました。



時間の経過とともに、任される働きの領域も広がり、責任を持って楽しく務めました。この中で、私の研究テーマの一つでもある、「経験し、関わること」の重要性を改めて実感しました。また、神学生としての経験を通じて、今後の伝道師や牧師としての働きを担う上での自信を少しずつ得ることもできました。これまでの経験を活かし、新たなステージへと進んでいきたいと願っています。

また、もう一つ感じたことは、教会員の皆様からいただいたお支えや励ましの尊さです。私は以前から、「良い牧会者になるための条件」に関して問いを抱いていましたが、この神学生としての経験を通じて、自分なりの答えを得ること

ができました。それは、良い神学生、良い伝道師、良い牧師は良い教会、良い教会員の皆様によって育てられるということです。日本の教会についてまだ十分に理解しておらず、日本語力も未熟な私を、そのまま受け入れ、限らない信頼を寄せてくださった教会員の皆様のおかげで、今日の私があります。数えきれないほどの愛とお支えをいただきました。愛にあふれる共同体を経験することができました。拙いものである私を、温かく迎え、抱きしめてくださった教会員の皆様の愛があったからこそ、今の私がいるのだと思います。このことを決して忘れず、私もまた、いただいた愛を分かち合いながら、教会での働きを続けていきたいと願っています。また、神学生として働く機会を与えてくださった同志社大学神学研究科及び全国同信伝道会、そして神戸教会の皆様へ、心より感謝申し上げます。まだまだ未熟な私ですが、派遣神学生としての貴重な経験を基にし、そして何よりも神様の導きに導かれて、この道を歩みを続けて参りたいと思います。

派遣神学生

小林 恭平

(神学研究科1年次生)

2024年度、高槻日吉台教会で派遣神学生をさせていただいております、神学研究科前期課程1年生の小林恭平と申します。高槻日吉台教会へは2021年10月より通わせていただいております、神学生として承認をいただいた時点で3年目の身ではありましたが、改めて神学生として働かせていただくことで、一信徒としてでは気付かなかったことに気付かされ、日々多くの学びを得させていただきました。

高槻日吉台教会では、先々代の神学生が始められた月に一度の夕礼拝を神学生の主な働きの場として与えていただいております。礼拝のスタイルや構成、選曲、説教にいたるまで任せていただいております。本教会の夕礼拝は、これまでの神学生の皆様や吉岡先生を通じて集まった学生たちが多く集まる、若い世代にフォーカスした礼拝です。最も特

徴的なのは、ワーシップソングやプレイズソングと呼ばれるコンテンポラリーな賛美歌をギターやピアノ、カホンを用いた奏楽で歌うスタイルを採っている点です。もともとは福音派系の教会を中心に始まったスタイルであり、私自身、福音派の教会で育ちこうしたスタイルに触れてきたという経緯もあるため、自らの経験を活かし礼拝のコーディネートをしております。また、夕礼拝は礼拝後の食事会も含めてのものとなっております。共に食卓を囲んでの交わりを大切にしています。

夕礼拝の働きを通して感じるのは、若者への伝道のために必要なのは形式にとらわれない自由な発想とその自由さを叶えるための十分な余白であるということです。教会は一度物事を始めると、それを終えるということを苦手とする傾向がありますが、勇気をもって働きを終え、新たな働きのために余白を生むこと、その余白をすぐに埋めてしまいたいという思いを踏みとどまり、そこに新たな芽が生えるのを待つことが大事なのではないでしょうか。と同時に、決して疎かにしてはいけない核となる



部分もあり、そのバランス感覚こそが重要であると感じております。

神学生としてはCSでの働きにもご期待を寄せていただいております、子どもたちと関わる機会をたくさんいただいております。そのなかで、子どもたちと信頼を深め、見守り、導き、そして子どもたちから学ぶ「まなざし」を、学んでおります。また、子どもたちと共に過ごすことで、私が子どもとの関わりが好きで得意であることに気付く事が出来ました。

来年度は、高槻日吉台教会を離れ、新たな場での働きに召されておりますが、この教会で学んだことを胸に、次の働きも尽力してまいります。

派遣神学生

村田 太陽
 (神学部2年次生)

こんにちは、現在私は日本基督教団洛陽教会で派遣神学生として奉仕させていただいています。2024年7月から始めたので約半年が経ちました。私は教会に備わっている伝道師館に住み込みをしています。引越しの時は松下牧師とおこなさんととても厚い協力をしていただきました。私は洗礼を受けたのが2024年のクリスマスでした。洗礼は同志社大学の神学部の講師としても働いている崔弘徳先生に、大阪の泉大津教会で授かりました。洗礼を受けて

から半年ほどしか経っておらず、教会のあれこれをほとんど知らない私を神学生として受け入れてくださった洛陽教会の皆様に感謝をしています。

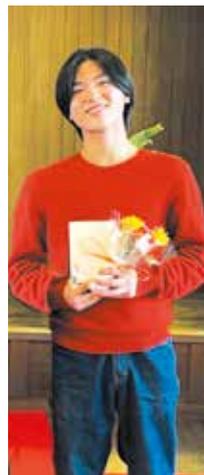
私の働きとしては、まだ2回生で大学の授業やアルバイトもしているということもあり、土曜日に週報の準備や日曜日の子供の教会のお話、礼拝後の会計、後は時間が許す限り食事の準備等々させて頂いています。日々教会の皆様の行動を見て、学んでいる最中でございます。

子供の教会でお話の時はまだまだ緊張しています。このような経験はものすごく勉強になり、自分の成長を感じる機会になっております。

このようにまだまだ未熟ですが、牧師の家庭と一緒に食卓を囲み、教会

での奉仕を通して、教会の皆様と関係が深まっているということを感じ充実しております。教会との関係が深くなることで、この教会の現状を考え、私ができることは何かということ、神様の導きに従い行動していこうと考えさせられます。

今は私の小さな祈りとしてこの教会に学生を招きたいと考えています。



派遣神学生

窪塚 俊太
 (神学部3年次生)

平安教会で派遣神学生の奉仕を始めて、約1年が経過しました。神学部の先生方から派遣神学生のお知らせを受けたのがきっかけで、平安教会に通うようになり、しばらくして神学生としての奉仕が始まりました(2024年3月のイースターの日に洗礼を受けました)。

私がさせていただいている奉仕は、週報の印刷等の事務作業、礼拝堂の掃除、また、子どもの教会での礼拝メッセージ・奏楽です。昨年秋頃から、1か月に1回、週末に「青年会聖書を読

む会」を開催していて、一緒に聖書箇所を読んで、思ったことなどを自由に語る時を設けています。まだ参加者は少なく、活動内容も模索中ですが、今後も参加者が与えられ、充実した集会となっていくようにと願っています。

神学生として教会で活動することは、神学を学ぶ上でもかけがえのない経験であると感じています。礼拝メッセージをすることを通して、聖書の御言葉と真剣に向き合えること、総会を通して教会の運営等について知ることができたり、牧師先生や教会員の方々と触れ合いの中で励まされ、イエスキリストや聖書について新たな気づきがあったりと、沢山の経験をさせていただいています。誠にありがとうございます。奉仕が与えられていることに

感謝しつつ、これからも平安教会での活動に取り組んでいきたいと思っております。(平安教会は京都市内にありながら豊かな自然に囲まれた教会です。今年で創立149年を迎えます。是非お越しください。)



新入生キャンプを振り返って

野村 琴音 (神学部4年次生)

神学部で共に学んでいく新しい仲間のために、自分自身が先輩方からたくさん学ばせていただいたことを伝えていきたいと思い、新入生キャンプに関わらせていただきました。今年度から泊りがけでの新入生キャンプが復活することになりました。泊りがけでのキャンプを経験したメンバーがいなかった中で運営には不安がありました。神学部の伝統を伝えること、そして新入生同士だけでなく先輩後輩、先生方との繋がりを持つことができる環境を持つことができる新入生キャンプには、新入生だけでなく自分自身の成長にも大きな財産になると思い、新入生キャンプのリーダーという役割をいただきました。他のスタッフたちには沢山迷惑をかけてしまったと思います。それでも支えてくれたスタッフには感謝の気持ちでいっぱいです。実際に新入生キャンプを迎えてみると、想定していなかったハプニング

が多くあり、準備が不十分であったことへの責任を感じていましたが、他スタッフや先生方、そして新入生からも楽しかったとの声を頂くことができました。また、新入生キャンプの後に神学館を訪れると、新入生同士が交流している姿が伺えたので、新入生キャンプが目的とする「新しい環境への不安を解消できる場」、そして個人的ではありませんが「神学部の伝統を伝えること」を達成できたように感じました。「新しい仲間のために」という気持ちのもと一丸となり、時間をかけて作り上げて迎えた新入生キャンプ

は素晴らしいものだったと胸を張って言うことができます。神学部の伝統である新入生キャンプに携わらせていただいた事、またそのキャンプのリーダーを任された事を感じたいです。神学部の伝統として続くこのイベントが、これから先も神学部で共に学んでいく新しい仲間のために続いていくことをお祈りしています。



お知らせ

●2024年度卒業・修了生

・学部	65名
・大学院博士課程(前期課程)	6名

●2024年度入学者

(1)学部第1年次生	65名
(2)学部第3年次生	1名
(3)大学院博士課程(前期課程) 神学専攻 (内社会人特別入試合格者2名)	7名
(4)大学院博士課程(後期課程) 神学専攻 (内社会人特別入試合格者1名)	2名

◆2025年度 神学部・神学研究科役職者

学部長・研究科長	村山 盛葦
教務主任	勝又 悦子
教務(国際)主任	木谷 佳楠
教務(入学)主任	森山 央朗
大学院教務主任	関谷 直人
	村上 みか
学生主任	杉田 俊介
研究主任	三輪 地塩

◆人事

退職(2024年11月15日付)	
准教授	中野 泰治
採用(2025年4月1日付)	
助教	杉田 俊介
助手(有期)	金 秀娟

新社会人になって



ウスフバイル・デミデジャムツ
(2023年9月卒業)

2023年に神学部を卒業しましたウスフバイル・デミデジャムツと申します。在学中は同級生や先生方から「デミ」と呼ばれ、親しくしていただきました。モンゴル出身で、2017年に鳥取城北高等学校へ入学して以来、日本に住んでいます。2024年の五月場所で大相撲の力士としてデビューしました。しこ名は師匠の宮城野親方(元横綱白鵬)に「聖白鵬」と付けて貰いました。昨年春まで宮城野部屋に所属していましたが、現在一時閉鎖中のため伊勢ヶ濱部屋でお世話になっています。五月場所での

番付は序ノ口三枚目から始まり、七月場所では序二段二十五枚目に上がり、序二段では優勝を果たしました。九月場所では三段目二十八枚目、十一月場所では幕下四十七枚目、今年の一月場所では幕下二十八枚目まで上がる事ができました。これからも一つ一つの取組に全力を尽くし、さらなる高みを目指して頑張りますので、ぜひ温かいご声援をいただければ幸いです。

新社会人になって



三浦 洋人(2023年9月卒業)

「何の仕事してるの?」「コンサルです」「コンサルって何するの?」

このやり取りを数十回してきましたので、今回もさせていただきます。コン

サルは課題を「発見」し、「解決」のお手伝いをするのが役割です。会計やITなど特定の分野に強みを持つコンサル会社もありますが、私が働いているアーツアンドクラフツ株式会社は戦略系と呼ばれ、「会社の方針を決めたい」「新しい事業を始めたい」といった会社さんのご要望にお応え、また考えるのをお手伝いするのがお仕事です。

仕事内容としては、業界についての調査から、財務状況の分析、解決策や新規事業の提案まであり、調査や資料作りから始まり、実際にお客様に提案できるようにすることを目指します。

神学部で私がテーマとしていたのは組織神学や歴史神学という分野で、仕事に役立ってる?と言われると、関連することは無いかもしれませんが、ただし学生時代、私の友人には何かしらのテーマや課題意識を持った人や、社会をフィールドに活動している人がたくさんいて、友人たちとの会話(大体は飲み会)はいつも発見や気づきばかりでした。そういう意味では、神学部での学びは、仕事で大きく役立っています。今学生の方でなかなか自分の興味・関心を絞り切れていない方へ、ちょっと大変ですがコンサル、オススメです。

事務室からのお知らせ

いつも『同神期報』をご講読いただきまして、ありがとうございます。

現在、神学部・神学研究科事務室にて『同神期報』を講読して下さっている方の住所管理を行っております。

ご住所・お名前の変更、講読に関するお問い合わせ等ございましたら、神学部・神学研究科事務室までご連絡ください。

なお、次号以降の講読を希望されない場合は **5月30日(金)まで** に神学部・神学研究科事務室まで FAX または E-mail にてご連絡をお願いいたします。

同志社大学 神学部・神学研究科事務室 FAX:075-251-3088 E-mail:ji-sinkn@mail.doshisha.ac.jp

2024年度 大学院博士課程（前期課程）修了者論文題

聖書神学研究

原 啓人 ヤコブの手紙 2:21-24に見られるユダヤ的聖書解釈について

歴史神学研究

藤田 和也 日本キリスト教史における超教派的な教会理念の実現の試み—日本基督同胞教会の合同運動史—

組織神学研究

金子 裕史郎 宗教学における「聖なるもの」の系譜—神学性の喪失とJ.Z. スミスの宗教学—

金 茶云 矢内原忠雄の預言者的思想の形成に関する一考察

実践神学研究

金 頭昇 現代の様々な死に応える現代キリスト教の葬儀を考えて

椿 克也 キリスト教における AI 活用に関する実践神学的考察—AIと礼拝、教育、宣教、牧会—

2024年度卒業論文のなかから

- 現代アメリカにおける宗教観とヒーロー像の形成過程—キャプテン・アメリカを事例として—
- 「イサクの燔祭」と「イシュマエルの燔祭」の解釈史—クルトゥビー『クルアーンの諸規定の集成』を通して—
- 先住民環境正義とスピリチュアリティ—#NoDAPL 運動を中心に—
- 太宰治の聖書理解—戦中・戦後作品にみられる自己表現への影響—
- 岡左内像を読み解く—なぜ岡左内は「キリシタン」として描かれないのか—
- 子どもに対するスピリチュアルケアの実践
- 「宗教性強迫性障害」に関する一考察
- フランスの同性婚における家族観の変容とカトリックの動き
- 古代メソポタミアにおける洪水神話の変遷に関する一考察
- キリシタンの龍理解—天草版平家物語から見るハビアの龍についての思想—
- 「見立てる」行為の宗教性の現代的意義—ヒトラー神話との比較から—
- 按手礼の歴史と連なる神学の考察—なぜ按手礼が用いられるか—
- ハンセン病とキリスト教—ハンセン病に関わる謝罪声明に関して—
- 児童養護施設の子どもたちに対するスピリチュアルケアについて
- モスク建設議論から見る右派言説の中の「ヨーロッパ」—アテネの公的モスク建設を例に—
- スクーク取引における「西厳東緩論」の考察—バーレーンとマレーシアの事例を中心に—

2025年度 入学試験 志願者・合格者数一覧表

	募集人数	志願者数	合格者数
推薦選抜入学試験	14名	29名	14名
自己推薦入学試験	6名	36名	6名
キリスト教主義学校の連携ネットワーク推薦入学試験	5名	4名	4名
法人内諸学校推薦入学試験	5名	5名	5名
外国人留学生入学試験	若干名	0名	0名
一般選抜入学試験	31名	300名	58名
大学入学共通テストを利用する入学試験	2名	32名	7名
第3年次転入学・編入学試験	若干名	7名	2名
神学研究科 博士課程（前期課程）入学試験	春秋合計20名	13名	12名
神学研究科 博士課程（前期課程）社会人特別選抜入学試験	若干名	3名	2名
神学研究科 博士課程（前期課程）外国人留学生入学試験	若干名	3名	3名
神学研究科 博士課程（後期課程）入学試験（春期実施）	5名	1名	1名
神学研究科 博士課程（後期課程）社会人特別選抜入学試験（春期実施）	若干名	1名	1名
神学研究科 博士課程（後期課程）外国人留学生入学試験	若干名	1名	0名

教会等赴任者 2025.3.1現在

この春、2名の方が宣教の現場に巣立っていきます。

藤田 和也(日本基督教団 岡山教会)
椿 克也(日本基督教団 霊南坂教会)

2023年度【神学部】主な就職先

国家公務員（一般職）
海上保安庁（海上保安大学校）
株式会社日本旅行
イオンリテール株式会社
キッコーマン株式会社
日本食研ホールディングス株式会社
スズキ株式会社
住友重機械工業株式会社
株式会社阪急阪神エクスプレス
野村證券株式会社
株式会社北陸銀行
株式会社ITコミュニケーションズ
株式会社時事通信社
独立行政法人国立病院機構
洛和会ヘルスケアシステム

STAFF ROOM

研究室から

アダ・タガー・コヘン

今年は研究の面においてとても良い年でした。聖書の儀礼に関する書籍（ブルームズベリー出版社）の編集に携わり、無事に出版することができました。2024年10月にはCISMOR、ベングリオン大学、HEKSHERIM研究所と共催で行われたユダヤ学に関する会議記録も出版することができました。また、計4つの国際会議にも参加しました（アムステルダム会議、CISMORと韓国IKTINOS研究所共催、スタンフォード大学タウベ・ユダヤ学センター、筑波大学およびヘブライ大学との大規模な共同会議）。また、今年はさまざまな研究書に私の論文が掲載されました。この1年間、学部生がユダヤ教と聖書、古代近東の研究に興味を持ってくれたことをとても嬉しく思います。

越後屋 朗

定年延長1年目に入りました。長らく担当してきた科目（旧約聖書学入門1・2と旧約聖書解釈学1・2・3・4）を黒柳先生におまかせしましたので、授業の負担がグッと減りました。今は、一人でも多くの学生がヘブライ語聖書原典を読めるようになること（辞書や文法書を使いつつ）を目標に、「聖書ヘブライ語」の授業内容をより充実させたいと考えています。

プライベートでは、ほぼ月に一度、実家に戻っています。母のことや、家のメンテナンス、除雪などで。年々、ふるさとへの思いが強くなっているようです。ちなみに、昨年末、スーパーでの熊の立てこもりが大きなニュースとなりましたが、実家はあのスーパーの近くです。

3月刊行予定の『「ナル的表现」をめぐる通言語的研究 認知言語学と哲学を視野に入れて』（守屋三千代・池上嘉彦編集代表）（ひつじ書房）に、以前「ナル

表現研究会」で行った講演の内容が載ります。

勝又 悦子

教務主任として、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの策定、新カリキュラムの導入・・・事務方のサポートにただただ感謝。「地の塩」プロジェクトでは学生の学びの深化を実感し、総括報告会では、先生方の授業手法のコツに興味深く聞きました。研究においては、あまりにも時間をかけ過ぎた、ユダヤ教の清浄規定についての拙稿が*Annual of the Japanese Biblical Institute vol.49*（日本聖書学研究所）に掲載予定。秋には、久々に日本宗教学会で発表。『ユダヤ文化事典』（丸善出版、2024年）の項目をいくつか執筆しました。2月、3月は、イスラエルからの研究者とミニシンポジウム、ワークショップと目白押しです。合間を縫って、勝手にAll Doshishaバドミントン同好会を名乗り、学部の垣根を超えて学生、職員さんとストレス解消してます。求ム、メンバー！

木谷 佳楠

今年度は150周年に向けて、『同志社百五十年史』の一部を執筆させていただいたり、法人内各学校からメンバーが集まる未来創造プロジェクトという活動に参加させていただいたりしました。同志社の歴史に関わる様々な資料に触れる内に、1980年から1993年にかけて宗教部（今のキリスト教文化センター）が発行した『レゴ』という雑誌に出会いました。当時神学部で教えておられた先生方が毎号でエッセイを寄稿されていて、読み応えのある雑誌です。『レゴ』に関して、『同志社談叢』に論文を書かせていただきま

した。今年社史関連で最も衝撃を受けたのは某所で見ていただいた新島襄の遺髪です。新島襄の聖書や自責の杖など、通常は複製品が展示されるので新島襄のリアリティはあまり感じられないのですが、遺髪の迫力は圧倒的でした。「新島襄は本当に生きて京都を歩いていたのか・・・」ということを実感しました。また、今年度は全学業務を三宅先生とご一緒させていただき、とても楽しかったです。

小原 克博

2024年、共著として以下の2冊が刊行されました。島菌進ほか『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』（NHK出版新書、対談および「近代国家が生んだ「犠牲のシステム」—「国葬」問題の深層」執筆）、島菌進ほか『宗教・カルト・法—旧統一教会問題と日本社会』（高文研、対談および「「信教の自由」と「良心の自由」」執筆）。

学長としての業務に専念するために、今年度、神学部では学部および大学院のゼミだけを担当しました（他に全学の授業を2科目担当）。学長就任以来、スポーツ等の課外活動を含む、様々なイベントを通じて、同志社大学の多様な学生と幅広く交流してきましたが、神学部学生との時間が少なくなり、寂しく思っています。

2025年、同志社は創立150周年を迎えます。歴史の大きな節目に立ち会う学長として、「同志社大学徳育の基本」として定められた「キリスト教主義」をはじめ、同志社を同志社たらしめる精神に立ち返り、人と社会に仕え、新たな価値を発信・実践できる大学となるよう尽力したいと考えています。

黒柳 志仁

神学部に着任し、早いもので1年が経ちました。院生時代から憧れであった神学館4階に研究室を頂き、本来ならば神学館図書室に入り浸り、ヘブライ語聖書研究に没頭したいところでしたが、2年前に息子が生まれ、オムツ替えと離乳食作りに追われる日々でした。今年度から担当させて頂いたインターネット授業「旧約聖書学入門」は、秋学期は履修者数700人を超え、越後屋先生と北村先生にサポートし

て頂き、何とか乗り越えられました。「旧約聖書解釈学」、「聖書解釈演習」は少人数クラスで、詩編講解と聖書の愛を取り上げ、学生と交流でき楽しい時間でした。昨年5月に科研費の研究成果として、共著で『「敬神愛人」をめぐる系譜と群像—「建学の精神」の源泉をたずねて』（日本キリスト教団出版局）を刊行しました。明治期の米国宣教師の日本伝道について纏め、「建学の精神とキリスト教」の授業で、今後も新島襄の思想を探る上で活かしたいと思います。

三輪 地塩

2024年度も諸先生方・事務職員の皆様のお支えと励ましに心より感謝しております。

研究としては、7月に論考「[キリシタン]が日本宗教に与えた意義と影響、そして「意味」」（『福音と世界』）、8月に論考「キリシタン研究の発展とキリシタン資料・遺物の「発見」史」（『創られたキリシタン像』）が掲載され、『キリスト教社会問題研究』（73号）に論文「植村海老名論争」叙述における“語り”の形成が予定されています。また9月に日本基督教学会「データで見る日本基督教学会の現状」、西南学院大学博物館「明治以降のキリシタン・イメージ形成過程とその所産—」という2つのシンポジウムにそれぞれ登壇しました。12月には、フリーマガジンの『ハンケイ500m』・Web版『ハンケイ京都新聞』の取材を受け、当研究室での学びとコンセプトについてお話しさせて頂きました。検索すると出てきますので、ご笑覧頂けると幸いです。

公的には上記のとおりですが、私的には「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」（劉希夷）の言葉を深く味わう一年でした。日々大切に過ごしたいとの意を新たにされています。

森山 央朗

2024年度の研究関係の出来事としては、やはりAFMA（アジア中東学会連合）の第15回大会を実行委員長として開催したことでしょう。AFAMとは、日本中東学会、韓国中東学会、中国中東学会、モンゴ

ル中東学会の連合で、2年に1回、上記4学会のいずれかの主催で大会を開催してきました。第15回は日本中東学会が主催し、本学今出川校地を会場としたいので私に実行委員長を引き受けてくれないかとの打診が2022年末にありました。その時は、それほど大規模にもならないだろうし、CISMORとの共催とすることで、大学に対するアピールにもなるだろうと気楽に引き受けました。しかし蓋を開けてみたら、国内外から40件あまりの個人研究発表と12件の企画パネルの申し込みがあり、一般参加登録も100名を超えました。そんな大規模な国際学会を仕切れるのか不安でしたが、神学部の事務室の支援や学生・院生・修士生が発表者や会場運営のアルバイトなどとして協力してくれたこともあって、12月7日・8日にわたって成功裏に開催することができました。得がたい経験でした。

村上 みか

今年度は国内外の研究者たちとよき交流の時間が与えられました。国外では宗教改革研究の拠点であるチュービンゲン大学神学部を訪ね、Witt教授より貴重な資料を見せていただきました。同教授のお申し出を受け、ドイツと日本のルター研究が学術交流を進めることになりました。またバーゼル大学のGäbler教授やBernhardt教授とも、よき神学的対話の時をもちました。ここ数年、ドイツやスイスの神学部教授とお会いすると、必ず神学部の存続危機の話が出ます。Bernhardt教授はカール・バルトのポストの後継者ですが、退官時にそのポストを維持するのが大変だったと聞きました。教会も同様に危機的状況にあり、双方ともにさまざまな対策を打ち出しています。

「再洗礼派をめぐる神学議論」を日本ルター学会で発表し、「宗教改革期における公共神学」（『日本の神学』）、「ルターの「ベスト文書」におけるキリスト者の倫理」（『基督教研究』）が公刊されました。ドイツの国際学術誌Lutherjahrbuchの編集にも携わりました。

村山 盛葦

2024年度も健康が支えられ無事に終えることができ感謝です。今年度も学部の研究主任として『基督教研究』の発行や図書室2階展示コーナーの作成をしました（テーマ：『同神期報』100号を覚えて。ホームページで閲覧可能）。インターネットクラスの「新約聖書学入門1, 2」は履修者数が1,000名を超え、京田辺の学生も含め多くの若者に新約聖書を紹介する機会が与えられ感謝です。研究の方は、研究ノート「テサロニケ教会の形成についての考察—古代ギリシア・ローマの任意団体との比較を通して—」（『基督教研究』86巻1・2号（2025年）pp.55-61をまとめました。

教会関係では河内松原教会（7月）、生野教会（8月）、賀茂教会（12月）、阿倍野教会（12月）において礼拝説教を担当しました。また、西日本献身キャンプ（7/31-8/2於同志社びわこリトリートセンター）に講師として参加し若き人たちと交流しました。信仰の継承を課題として覚える日々です。

関谷 直人

「卒業記念」（正確には役職定年前あたり）として?1年間神学部長をやらせていただきました。これまでは外野から言いたいことを言ってきた教授会でしたが、この一年間は「与党」の立場です。これまで学部長を担ってくださった先生のご苦勞を思い、頭が下がり、また言いたい放題であった自分を恥じる1年でした。それでも、部長会に出て他学部の部長と話をしたり、入学式や卒業式の式典では「お祈り屋」よろしく、祈禱や祝禱をしたりするといったような、これまでにはなかった様々な経験をさせていただきました。これらはどれも刺激的で楽しいもので、感謝でした。

個人的には2025年度からは「定年延長」に入りますので、学部では「半分隠退」状況です。できることなら、猫ズと一緒にゆったりと過ごしたいのですが、新カリキュラムの関係もあり、担当クラスはむしろ増えそうです。もう暫くは「老体」にむち打って頑張ります。

牧会者準備セミナー2025

岡本教会牧師 / 同信伝道会教職養成部門委員長 栗原 宏介

2025年2月18～20日、同志社大学の神学館を会場として「牧会者準備セミナー2025」が開催されました。神学部と同信伝道会（教職養成部門）の共催として15年以上続いているこのセミナーは牧会を志す学生と牧会経験3年目までの方々を対象としています。このセミナーは、いわゆる職業訓練的な「技能を教える」セミナーではなく、牧会の現場に赴いていく不安や牧会現場での戸惑いや課題を同僚の友と共有し、希望を新たに再びそれぞれの現場へと帰って行くことができるように、出会いと交わりの機会を提供し、リフレッシュできるようにとの願いを持って実施されています。

今回は8名（学生3名、教職4名、既卒1名）の参加者が与えられ、スタッフ・講師を含めると21名での開催となりました。部分参加の方々も多く、参加者がすべて揃うことがなかったことは残念でしたが、それでも開催でき、出会いの機会が与えられたことは本当に良かったと思います。

開会礼拝は神学部長の関谷直人先生によって執り行われ、「寄留者」というタイトルでメッセージをいただきました。その後石川立先生を講師として神学講演が行われました。講演題は「聖書のことばとの出会い—聖書翻訳を通して学んだこと—」、講演の前半は「聖書協会共同訳聖書」の翻訳に臨まれた際のご経験からお話いただき、後半は聖書の言葉を「私」の言葉にしていくということを中心にお話いただきました。聖書の言葉を解釈して、そこに新鮮な出会いを経験し、意味を創出していくことの豊かさをお示しいただきました。聖書を「耕す」ということをキーワードとして、踏み固められたテキストの上に立ち止まって、耕し、そうして表出した言葉と新鮮な出

会いをし、そこにある意味を味わい直す必要があるということをお伝えされました。参加者は（あるいはスタッフも含めて）、在学中の授業を懐かしく思い出しながら、刺激を受けて、教会の現場で聖書の言葉と向き合う思いを新たにすることができました。

1日目夕方には「リフレッシュセミナー」が行われ、2名の講師の講演を参加者が選択し受講しました。実践分野の講演は今井牧夫先生（京北教会）が担当していただき、「牧師の人生と信仰の設計—実践神学の課題として—」というタイトルでお話くださいました。今井先生のこれまでの歩みを振り返り、さまざまな葛藤と挫折を繰り返しながら、紆余曲折を経つつ歩んでこられた信仰生活を誠実にお話くださいました。それはさながら壮大な証ともいえるべきものでした。これから牧師になる方々には刺激的だったかもしれませんが、しかし、牧会生活のリアルなお話の中に、苦悩と痛みでは終わらない確かな希望があることを感じ取ってくれたのではないかと思います。「理想と異なる現実の中でがんばり、燃え尽き、再生する」との言葉は重く響くものでしたが、そうした繰り返しの経験が牧会者としての大きな賜物になっていくことを知らされました。

神学分野は加藤俊英先生（下関西教会/下関彦島教会/小月教会）がご担当いただき、「教会合同と『天皇制国家』—1925年から1941年を中心として—」というタイトルでお話くださいました。日本基督教団成立に至るまでの歴史的経過を「天皇制国家」との関わりの中で論じていただき、現在の日本基督教団にある者への問題提起を含んで考えさせられる講演となりました。「教会合同の目的は何であったか」、「天皇制国家なくして合同教会の成立は可能だったか」、「皇紀二千七百年、天皇の死去、代替わりにどう対応するか」などの問題が投げかけられました。参加者がそれぞれの現場に持ち帰り、継続的に考えていかなければならない課題です。

2日目には尾島信之先生（南大阪教会）による主題講演が「『牧師』という

生き方をする」というタイトルで行われました。尾島先生は講演の中で、「『自分らしさ』というものがなく、他者に勧められる形で流されるままに、『牧師』となっていた」と語られましたが、そこにこそ「神の導き」というものが確かにあって、用いられているのだと感じました。そのようなご自身の歩みを振り返られつつ、「牧師」として生きるということを示してくださいました。また牧師で大事なことは「いる」ことであるという言葉は深く心に沁みました。「いる」ということがどのようなことであるかについても参加者とのやり取りの中で深められたと思います。物理的に「いる」とこと精神的、概念的に「いる」ことの両面において牧師という生き方が問われています。

各種の講演のほかに参加者によるワークショップの時間も設けて、近況を聞き合い、またそれぞれが抱える課題や思いといったものを共有いたしました。ともすると孤独に陥りやすい牧会現場での働きの根本的な課題も見出しつつ、こうして話を聞き合える同僚の友がいたことは恵まれたことだと気づかされました。プログラムの最後は、バザールカフェで昼食を共にし、その後、同信伝道会会長の菅根信彦先生（同志社教会）によって閉会礼拝が執り行われて3日間のセミナーを終了いたしました。

参加された方々が、それぞれに得た思いを現場へと持ち帰って、より良い働きをなしていくことができるようにと心から願っています。最後になりましたが、このセミナーの実施のために多くの方々からお支えいただき、またお祈りいただきましたことをこの場を借りて感謝いたします。どうぞ今後ともよろしくお祈りいたします。



留学生クリスマス会

12月17日、神学館にて留学生クリスマス会が開催されました。この会は、クリスマス時期に故郷に帰ることができず、日本の地で寂しくされている留学生たちを励ますために毎年行っているものです。コロナ禍で数年中断されましたが、2023年度から再開され、今年度は中国・韓国・イスラエルから6名の留学生と、神学部教員11名の合計17名が参加しました。夕食後、それぞれ自己紹介を行い、日本での経験や神学部での学び、楽しかったこと困難なこ

と等々、率直なお話しを聞く機会が与えられ、楽しい親睦の時を持つことができました。最後は、日本語、韓国語、中国語で「きよしの夜」

（고요한 밤 거룩한 밤・平安夜歌）を歌い、それぞれの国と、キリストの降誕に思いを馳せる夜となりました。

時々刻々と変化する世界情勢の下、東アジア諸国や中東諸国の国際関係は常に平和と安寧に満ちているとは言えません。ですが、留学生と共にこのような会を

催し親睦を深めることが、我々にとっての「平和の祈り」なのかもしれない、そう思われるアドベント第三週の一夜となりました。（三輪 地塩）



神学部公式Xアカウント「@STheology_DU」を開設しました。神学部に関する雑多な情報を発信し、本学部に対する社会的認知の拡大を目指します。積極的なフォローと拡散をお願いします。ただし、入試や履修登録などの重要事項については、大学公式サイトなどの確認を怠らないようにしてください。（森山 央朗）

